

【書籍紹介】柴田 亮 著『中世前期の在地社会と東アジア交易』九州西北地域の考古学

古門 雅高

はじめに

2026（令和8）年2月20日、私が長らく待ち望んだ研究書が世に出た。それが標題の柴田 亮 氏の著書である。本書は、氏が熊本大学に提出された博士論文をもとに学術書として昇華させたものであると同時に、私の力不足から発掘調査報告書で十分書けなかった中世・竹松遺跡（註1）の歴史的评价をまとめあげた書でもある。先に「私が待ち望んだ」と書いた理由はそこにある。

現在、氏は岡山大学の文明動態学研究所に勤務されているが、以前は本県大村市教育委員会で文化財行政に携わっていた。氏が同市に奉職された時には、既に西九州新幹線建設に伴う竹松遺跡の大規模な緊急発掘調査が実施されていた。その頃、同遺跡では四面廂建物跡（註2）や長大な区画溝跡、倉庫群跡など、古代末から中世前半の大発見が相継いでいた。氏が関心を寄せていた時代が当該期であったこともあり、同遺跡の調査成果はおのずと氏の研究対象となっていたのである。

以上のような経緯から、本書には私も特別な思い入れがある。

しかし、ここでは柴田氏の著書を紹介するものの、氏の研究成果を具体的に記述することは避けることにした。理由は、私が本書を西北九州の中世考古学の最新研究であると認識するとともに、これまでになかった西北九州に特化した中世考古学の概説書、入門書と評価するからである。そのため、皆さんには本書を実際に手に取って読んでいただきたいという想いがある。その点ご容赦願いたい。

1 著書の目次

本書の構成は序章、終章併せて8章からなる。

以下は具体定な章立てである。

序章

第1章 中世考古学研究と九州西北地域

第2章 土師器の型式学的検討

第3章 九州西北地域における瓦器碗研究

第4章 滑石製石鍋と九州西北地域

第5章 数量分析からみた九州西北地域の食器流通とその背景

第6章 遺構の分析による大村湾沿岸地域の評価

終章 中世前期の九州西北地域と東アジア交易

2 各章の概要

第1章は氏が主なフィールドとした大村湾沿岸の地理的地質的歴史的環境から書き起こし、わが国を含む東アジア海域の交易活動を概観しながら、本書が対象とした11世紀後半から13世紀の対外交易の在り方を整理している。

第2章から第4章は土師器、瓦器碗、滑石製石鍋といった中世遺物の型式学的検討と考察からなる。これらの遺物は遺構や遺跡の時期判定に不可欠であるが、当地ではそれまで大宰府編年や消費地での編年との比較検討に終始し、出土した土器が各地の編年のどの時期に充てはまるかという検

討に注力してきた観がある。それに対して柴田氏は、在地資料の型式学的検討を重ねたうえで、在地資料のみで編年を構築するという地域考古学の本来あるべき姿を示された。特筆すべきは実際に遺物を実見し、自ら実測するその量の多さである。出土品のうち、完形品と言わず破片と言わず、研究対象とした出土遺物は全て見るという氏の悉皆調査の姿勢と気概は素晴らしいものがあつた。例えば竹松遺跡から出土した滑石製石鍋は破片を含めた数量が約4,000点といわれる（新幹線文化財調査事務所編 2020）。それをくまなく実見したのは同遺跡の一部の調査員を除いて柴田氏だけであろう。

第5章の数量分析でも氏の悉皆調査という方針は貫かれている。当地の従来の数量分析は出土土器の種類別の数量を算出して、相対化することで遺跡の特徴や性格を考察してきた。同書で氏はこの方法では遺物の時期的変遷や質的差異の考察が不十分であることに加え、分析の鍵となる貿易陶磁の出土傾向を他地域のそれに依拠するのではなく、当地の貿易陶磁の出土傾向に基づいた比較検討が必要であることを説いている。さらに遺物の数量のみではデータの客観性が担保できないとして、重量の計測データを併用しながら分析を行っている。

また、検討対象とした遺跡に本土部の遺跡のみならず島嶼部の遺跡も加え、それらを交易と消費のネットワークの中の役割によって差別化したうえで考察を行っている。

以上のように研究の視点や方針さらには研究方法を明確に示したうえで、黙々と悉皆調査ならびに分析を行って導き出した本書の結論は、きわめて説得力を持つと言わざるを得ない。

3 中世・竹松遺跡の評価

氏は第6章で竹松遺跡から検出された中世の遺構群のそれぞれの機能や役割などの分析検討を行い、各遺構の関係や時間的変遷を明らかにし、ひいては遺構総体である中世・竹松遺跡の歴史的評価を行っている。

続く終章では前章で明らかにした中世・竹松遺跡の歴史的評価を我が国の中世史や東アジア交易史の中に位置付け、地域を越えたより広い視野で同遺跡を再評価している。この章によって同遺跡は日本中世史や東アジア交流史の重要な構成要素となったと言えよう。

また地域史的には当該期の大村湾沿岸に位置する竹松遺跡、白井川遺跡、門前遺跡の交易上の役割と相互関係がより具体的に解明されたことが特筆される。

4 竹松遺跡に関する近年の学界による評価

2022（令和4）年10月に九州大学で開催された日本考古学協会福岡大会では杉原敏之氏と菅波正人氏に竹松遺跡を大きく取り上げて頂いた。

早稲田大学の田中史生氏には、ご自身の著書や論文などでたびたび同遺跡を引用して頂いている（註3）。

巷間、竹松遺跡が古代末から中世前期の東アジア交易史において重要な位置を占めていたことが解明されつつある。しかしそれは主にマスコミ報道であったり、研究者の独自調査であったり、研究者間の情報交換であったり、発掘調査報告書からの情報などに基づくものである。今回、柴田氏の著書が公になって、同遺跡の考古学的研究が飛躍的に進展したことにより、中世・竹松遺跡の歴史的評価が今後さらに定まることを確信している。

【註】

- 註1 竹松遺跡は西九州新幹線建設に伴う緊急発掘調査として長崎県教育委員会が鉄道運輸機構（独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構）の委託を受け、新幹線文化財調査事務所を設置し、2011（平成23）年から2017（平成29）年まで緊急発掘調査を行った。発掘調査面積は約10万平方メートル、検出した遺構数は約700基、出土した遺物数は約700万点、投入した作業員の人数はのべ20万人、調査費は予算ベースで約50億円であった。
- 註2 長崎県教委による発掘調査と、その後の大村市教育委員会の調査で検出されている。
- 註3 堀内和宏氏（青森県つがる市教委）よりご教示。

【引用・参考文献】

新幹線文化財調査事務所編 2020 『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書 第12集 長崎県教育委員会

